テーマ 1

まちづくり、地域振興ツールとしての「水」

坂本貴昭氏

地域交流センター研究員
全国Ｅボート連絡協会の全体調整事務局としてＥボート活動の全国展開を進めている。
地域交流センターは、全国Ｅボート連絡協会、全国水環境交流会、ダム水源地交流協議会、日本トイレ協会の事務局にもなっている。

interview

水の力を地域づくり・まちづくりにつなげる

社会実験－Ｅボート

水のもつ“交流力”を活用した地域づくり・まちづくりツールとして、「Ｅボート」と呼ばれる簡易組立式ボートを用いた交流プログラムが、新聞紙上で紹介されています。水がもつ魅力を、どのように活かしているのでしょうか。このプログラムを開発した「地域交流センター」を訪ねました。

Ｅボートとは…

――地域交流センターの活動は一九七六（昭和五十一）年から始まっているわけですが、Ｅボートの活動を始められたきっかけをうかがえますか。

坂本　そうですね。「良い町には、良い川がある」ということはよく言われます。でも、近年はコンクリートで固められた川に汚い水が流れている。そこで川を見直してみようという運動が各地で起きていました。そうした運動の一つとして、ダム湖をどう活用するか、という課題が生まれてきたのです。

誰でも、簡単に楽しめるがキーワードのＥボート。10人乗りの手漕ぎボートだ。
写真のＥボートは、リサイクルペットボトルが原料。

地域交流センターは「社会実験」を重視しています。「交流」を考える際、学問追及や研究も大切ですが、机上の数値からだけの検証では現場から遠ざかってしまい、物事の真の姿が見えてこない。ですから、我々の目指すところは、「シンクタンク」ではなくて「ドゥータンク Do tank」という考え方で「交流」を考えていきたい。そうした考え方からも、ダム湖の活用は、人が水辺に近づくための良いチャンスになるだろうということで、「うまく道具を使って、水に親しむ機会を作ろう」と、いろいろと検討してみました。しかし、実際、ダム湖でカヌーなどを浮かべて試してみると、道具の操作が難しいため気軽に人を呼んで水に親しむ、という状態にはなりにくかった。操作には熟練を要するし、単独競技であることなどが、障害になってしまったのです。そこで「誰でも」「簡単に」「楽しめる」をキーワードに、十人乗りの手漕ぎボートという条件で、ボートメーカーの協力を得て開発したのがＥボートです。一九九四（平成六）年のことです。発想の元になったのは中国のドラゴンボートですよ。そこからスポーツの要素を弱めて、オリジナリティのある道具を作ろうということになったのです。

――ＥボートのＥは、何を意味しているのですか。

坂本　最初は「交流ボート」と呼んでいたので、《Exchange（交流）》のＥでした。それが、「待てよ、環境問題にも取り組んで

いくのだから《Eco-life（環境に優しい生活）》もあるよね」ということになり、Eで調べてみたら「Ecology（生態学）」、「Envi-ronment（環境）」、「Education（教育）」、「Epoch-making（新時代の創造）」、「Earth（地球）」、といっぱいあるんですよ。コンセプトはそういうことで、「誰でも気軽に水辺に来て楽しんでほしい」ということを基調にしています。また高齢者や身体の不自由な方など、普段水辺に来られない人にも来てほしい。なぜなら、そうした人たちを含んだ社会全体として水に親しんでいかないと、なかなか人々の意識は変わっていかないからです。子供からお年寄りまで、そしてその中には身体が不自由な方も含まれていて、みんなで協力してボートを漕ぐところに意味がある。Eボートは、何社ものメーカーが協力して開発して下さり、搬送式から組立式までいくつかの種類があります。でも、今では組立式のものが、「運搬費が安く済む」という理由で主に使われています。

一艇一艇に ストーリーが生まれる

坂本　Eボートのプログラムで大事なことは、こちらで全部準備して「はい、どうぞ」とお膳立てしては駄目なんです。それでは、参加者はお客さんになってしまう。それは絶対避けたいので、参加者に運搬、組立て準備からやっていただきます。そうするとおもしろいことに、部品を組み立てる段階から、そのチームの物語、ドラマが始まるのです。一艇、一艇のチームに、それぞれのストーリーが生まれます。そこで芽生えた共同体意識が、クラブになって、まちづくりの核になってもらえれば、こちらとしてもこれほどうれしいことはありません。

――Eボートを使った交流行事は、何カ所で行われていますか。

坂本　約五十カ所です。川の大きさよりも、やはり舟の操作の特性で、静水域のほうがやりやすい。いろいろな所で行ってみると、エピソードもたくさん生まれています。先ほど、ストーリーと言いましたが、エピソードもあるのです。

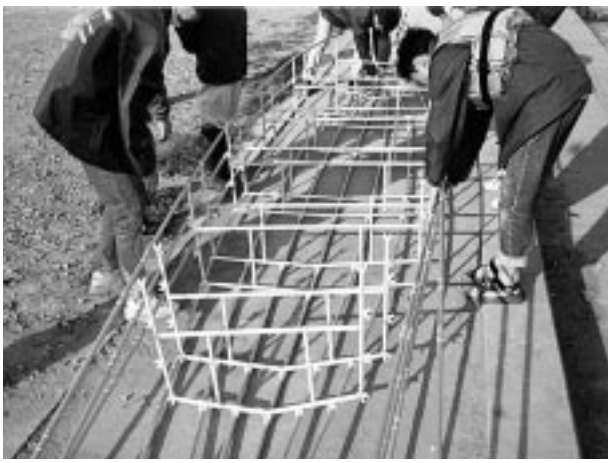
熊本県の球磨川では、初めて全盲の方が参加されました。最初は怖がっていたのですが、そのうちに、風を感じて楽しんでくれた。その方は「川は風の通り道」と言うんですね。漕いでいて何が楽しいかというと、風によって川を感じることだと言うのです。

運搬、組み立てから始めて、チームごとのストーリーが生まれる。部材を確認→枠組み作り→布張りまで約四十分の作業を行ううちに、連帯感が芽生えてくるから不思議だ。

また、高齢者の例でいうと、静岡県の富士川でやった交流会の時に、芋煮会の準備に追われていたおばあちゃんにも乗ってもらった。もう八十歳ぐらいのおばあちゃんでしたが「もういつ死んでもいい」と言ってほんとうに感激してくれました。

北海道の千歳川では河川清掃をずっと行っているのですが、鮭の密猟が減ったという報告があります。

山形県の長井市の中学生が東京に修学旅行に来た時に、Eボートを利用してくれたこともありました。日本橋川と亀島川が交差しているところから隅田川まで出て、佃島まで行ったんです。佃島では一人がボートを降りて佃煮を買いに行き、その後、東京都の河川課の人に東京の川のお話をしていただきました。彼らは、前日に下水処理センターの見学もした、と言っていました。そうした一つのプログラムの中に、Eボートを取り入れてもらっています。



川の水面・水際・上空を トータルで活用してみる

坂本　こうしてエピソードが出てきて活動しているうちに、「それなら、横の連絡組織を作ろうじゃないか」という話が持ち上がり、一九九六（平成八）年十二月から情報交換の場を持つことになりました。そして年に一回集まって意見交換するというこ

とで、「全国Eボート大会」が始まりました。

――この大会では、どのようなことを行ったのですか。

坂本　Eボートに乗るのはもちろんですが、水辺の使い方を実験してみようという趣旨から、「水面」「水際（陸、河川敷）」「水面の上空」という三つの空間をトータルで使う方法を考えて実践しています。この三つの空間を活用するために、Eボートと同様に機会と道具を提供しています。水面は、Eボートですよね。水際では、馬に乗ってもらったりしています。空は、パラグライダーで楽しんでもらう。一九九九年に第三回全国大会が、北上川で行われました。

――今、全国で何名ぐらいの人が所属しておられるのですか。

高齢者も楽しめる、Eボート。全員が破顔一笑。

坂本　把握していません（笑）。実は、そこをこれからやらなくてはいけないのです。関わってきた人が全部仲間だよ、と勝手に言っているだけで、会員登録をして会費を取っているわけではないですから、正確な数を把握できないのです。我々の組織運営の考え方が、「コンセプトは共有して、後は地元の方に任せる」というものなので。しかし、そうも言っていられない規模になってきましたので、そろそろきちんと整備する予定ではおります。Eボート自体は、現在全国に九十～百艇ぐらいあると思います。

Eボートは地域おこし まちおこしの道具

――Eボートの活動が、一つのステップとなって地域おこし、まちおこしにつながるとよいわけですね。

坂本　ええ、そこが本来の目的ですから。Eボートに乗って楽しんだ経験を、次のステップにつなげてほしいのです。しかし、そのことは本当に難しいですね。我々はEボートの位置づけを、流域連携事業の中で五項目に分けてとらえています。

一　流域を知るための活動
二　流域を守りながら使うための活動
三　流域を考え、川に親しむための活動
四　環境保全型生活を誘導するための活動
五　合意形成のための活動

の、五つです。要するに、イベント性が最終目的ではないのです。

社会実験の結果は…

――Eボートを始めたきっかけは、社会実験と言われました。現在の結果は当初の予想通りですか。

坂本　そうですね、当初の大きな目的は、水辺にもっと人を来させよう、ダム湖をどう利用するか、という二点だったのです。特に、ダム湖の利用が優先課題であったのに、その部分はまだ未整理の状態です。むしろ派生的に分かってきたのが「教育(Education)」の側面で、こちらの効果が絶大に上がっているということです。

――今後、教育的側面では、どのような展開を考えているのでしょうか。

坂本　既に効果はある程度上がってきているので、これからはポイントを絞ることと、いつでもこのボートが置いてあるという「常設化」「日常化」を図ろうとしています。いわば、拠点づくりにあたります。手始めに、茨城県藤代町で拠点づくりを進めています。ここを水面、水辺、空の三つの空間を、三次元で使える水辺空間の拠点にしていこうということです。拠点を作るということは、人とプログラムを育てるということですから、その方面で今実験段階を経て実施に向かっています。

――父母や学校の教師の反応はいかがですか。

坂本　まあ、温度差はいろいろありますね。子供はすごく喜びます。でも、責任問題などが絡んでくるので、今は賛同者とゲリラ的にやっているというのが現状です。水辺の利用ということでは建設省、教育に的を絞った場合は文部省という風に、縦割り行政の問題もありますから、地域交流センターとしては省庁との連携を高め、理解を深めるための勉強会なども催しています。たとえば藤代町を例にとれば、これから高速道路が開通するのですが、北関東三県で連携して高速道路をどう使えば地域が良くなるか、ということに具体的に取り組んでいます。医療、河川、物流といった事柄を切り口にして、どういう地域連携をしていこうかということです。

――Eボートに乗った後のまちづくり効果の方はいかがですか。

坂本　こればかりは、追跡調査が非常に難しいのです。しかし、最終的にEボートファンクラブを作って、意見や案件を監督官庁に持っていくまでに育っていってほしいです。

――Eボートに一度乗った人は、その後ストーリーをどう発展させていっているのでしょうか。

坂本　二回目も乗るというリピーターは、とても多いです。ただ、その人達のストーリーが発展するところまではなかなか至りません。そこまでの自立意識、活力はやは

り希薄ですね。ストーリーが育っていくには、やはりよいリーダーの存在が不可欠だと思います。

技術的にはもちろん、その後の地域コーディネートの役割りが担える、インストラクターを養成するのがこれからの課題。

今後のプログラム

――水がこれだけ、人を惹きつけるのは、なぜだと思いますか。

坂本　水というのは、自然の一部ですよね。それで無条件で、人が感応するのですね。水辺に行くと非日常性を感じます。そして同時に、身近な自然の象徴でもある。特に都市部では、ほかの自然が身近にありませんから、水が重要になります。加えて、危険を伴うことも含めて、畏敬の念を抱かせる存在であること。それらが全部一緒になって水の魅力として、人を引きつけるのでしょう。川は人的な煩わしさ、行政区分など関係なく流れていきますから。山と海をつなぐのが、川です。昔は、川は生活の大動脈であったわけです。徐々にではありますが川が果たしてきた道としての役割も、見直されていく方向にあります。環境としてだけ水辺をクローズアップするのではなく、総合的に見直すことで、現代のひずみを解決できるのではないかと思っています。

――リーダーの養成方法はいかがですか。

坂本　水辺の利用ということで、危険がないように舟の操作と水の事故に対応できる人を、インストラクターとしてお願いしています。実際には、日本ロイヤル・ライフセーヴィング協会とタイアップしています。Eボートはスポーツ指向ではなく、教育指向、環境指向なので、そこを理解して協力してもらっています。しかし、安全管理や船の操作に加え、インストラクターに求められる本来の資質としては、地域コーディネーターとしての役割なんですね。ですから、全国大会のときに、講習会や技術交換を行っています。そういった意味でも藤代町を拠点として、若い層のボランティアを増やしていきたいと考えています。

――Eボートのように、人と水との間に道具を介在させて地域おこしに貢献しよう、という活動のメリットはどこにあるのでしょうか。

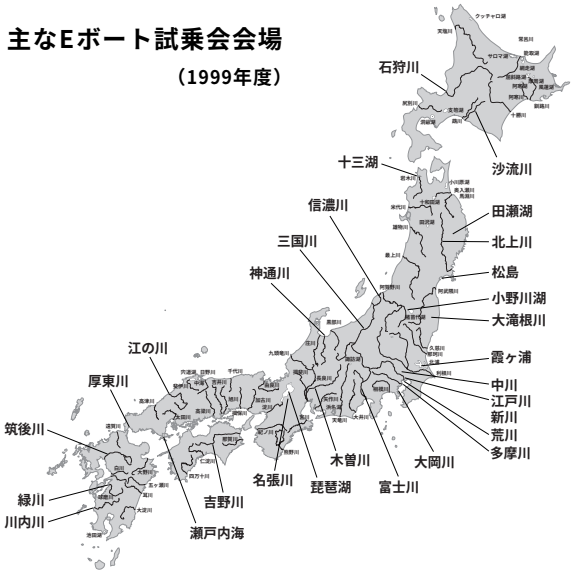
坂本　道具を使うことで、継続性が生まれやすくなるのです。いったん水から遠ざかった人の目を、もう一度水辺に向けさせるには、わかりやすい手法なんですね。水を総合的にとらえる、という点からも行いやすい。河川清掃や水質調査といった活動も良いのですが、個々のテーマだけになってしまいがちですから。実際に、千葉県市川市のボーイスカウトは、河川清掃にEボートをプラスして、水辺の活動を喚起する方向にうまくつなげていっています。

――当初、ダム湖利用から端を発したEボートですが、これからの活動について教えて下さい。

坂本　やはり拠点づくりですね。ダム湖はもちろんのことですが、都市部にも目を向けていきたい。先日、夜間に日本橋川でEボートに乗ってみたのです。コンクリートで護岸され高速道路で蓋をされている川ですから、昼間はこんなものかと思ってしまうのですが、夜乗ってみて、すごくきれいで感動しました。都市河川にもこういった舟を置いておいて、気軽に乗れるようにしたり、川岸でオープンテラスのカフェをやってみたり。コンクリートビルの谷間にも、水の快適さを残していきたい。ですから、今後は都市河川の拠点も必要であると思っています。

主なEボート試乗会会場

（1999年度）



Eボートのホームページアドレス
http://www2.justnet.ne.jp/~eboat

news storys of water

【まちづくり、地域振興ツールとしての「水」】に関する新聞記事

全国様々な方法で「水」が地域づくりに活用されています。自然にふれることの少ない都市部でのまちづくりや、地方の地域おこしなど、水に絡む催事、事業、運動、その多さに驚かされます。水辺がいかに「非日常的な空間」としても見直され、いろいろな象徴的意味をもつ空間・多様な交流を生み出す吸引力をもつ場として意識されていることが分かります。たとえば、なかなか水空間に接することの難しい都市の下町でも、「銭湯」などはコミュニティの寄り合い場として、繰り返し話題になっています。また、人々は川に「コミュニティの財産」という意味を読みとり、数多くの催事が開かれています。さらに、上流と下流を一緒に考えるという意識が生まれ、“流域”で地域を考えようという感覚も芽生えてきているようです。

「水」のもつ非日常性を、まちづくりや地域振興の核にどのように役立てていくか — 水は多様で大きな可能性を感じさせるツールなのでしょう。

※ご紹介するのは、データベース化した水に関する新聞記事より、朝日、読売、日経、日経産業の記事の一部分です。どの記事も要約されたものです。

【湧き水】

◆「水の街」再興願うマップ。「銀座に昔のようなせせらぎを取り戻したい」。そんな思いを持つ中央区銀座の商店会役員らが集まり、井戸の位置などを詳細に記した「銀座湧水のマップ」を作成した。二年間にわたる調査の結果、現在は消えてしまった井戸の場所も記した力作。役員らは「マップの作成を、せせらぎ復活の第一歩にしたい」と話している。

マップを作成したのは、銀座御門通り会会長の椎葉一二さんと銀座金春通り会会名誉会長の勝又康雄さんら約二十人。二年前、椎葉さんら商店会の役員にマップの作成を呼びかけたところ、「せせらぎを復活させるためにも、湧水の場所を確認しておくのは大切」と、賛成してくれた。

（一九九五年十二月十日　読売）

◆ピンチ！柿田川の水量減少。富士山を源にした静岡県清水町の柿田川の水量や流域の地下水の減少が深刻化している。中でも、柿田川の水は最盛期に比べて四割も減少。上水道の水源にもなっているだけに、「このままだと、飲料水にも影響が出かねない」と、柿田川の自然保護に取り組む市民グループ八団体は、十日に「柿田川・東富士の地下水を守る連絡協議会」を旗揚げする。同じ湧水がわき出て「東海の名園」とうたわれた三島市・楽寿園の「小浜池」は、水深二メートルあった水が六十年代から徐々に枯れ、今春には、水位は地下五メートル余まで下がった。連絡協議会の呼び掛け人の一人で、柿田川みどりのトラスト会長の漆畑信昭さんは「水はいっそう大切になっていく。百年の計をたてて取り組まねばならない」と話している。

（一九九六年八月六日　読売）

◆湧き水が呼び水に。雇用確保に期待。熊本白水村・愛媛西条市。企業の進出続々。全国に「おいしい水」ブームを巻き起こした環境庁の「名水百選」選定から十年余りがたった。予想を上回る集客効果に戸惑う向きもあったが、今では地域に誇りと活性化をもたらすシンボルとして定着しつつある。

（一九九七年二月十九日　読売）

◆銀座にせせらぎを。「湧水の会」具体案を提示。銀座に「せせらぎ」をつくりたいと動いている、中央区銀座八丁目の洋装店主勝又康雄さんらが、今月初旬、中央区役所の竹内荘之助役を訪問。具体案を描いたスケッチ三枚を示して、区側の協力を求めた。勝又さんらは、防災と景観の両面で、銀座に水を確保する必要性を痛感し、十二年前に「湧水の会」をつくり地下水探しを始めた。その結果、これまでに古い測量地図に記載された三十三の水源のうち十五地点を確認し、古地図には載っていなかった五つの水源も見つけた。一九九五年十一月には、十二色刷りで、埋め立てられた水路や、橋、史跡、それに現存の通り、有名な建物などを書き入れた「湧水マップ」を三千枚作り、関心のある人に配った。中央区もこの提案には強い関心を示した。

（一九九八年三月八日　朝日）

【川】

◆荒川から情報発信。市民五十人がリポーター。新月刊誌三月創刊。荒川下流域の様々な生活関連情報を紹介する月刊情報誌「ハローあらかわ生活情報MAP『ARA』」の創刊準備号がこのほど完成し、無料配布されている。川沿いの八区二市の住民から寄せられた情報を紙面を通じて積極的に発信し、交流の輪を広げていくのが狙いで、編集スタッフは「荒川の魅力を再発見してほしい」と張り切っている。情報誌を発行したのは、「あらかわ自由放送局（略称・ARA）」。同局は、荒川放水路通水七十周年を記念して建設省荒川下流工事事務所が推進している「荒川クリエーション」事業の一環として、昨年六月に設立された。同事業は、荒川の歴史や文化、自然への認識を深めるとともに、二十一世紀に向けての荒川の未来像を描こうと、荒川下流域の八区二市（墨田、江東、板橋、北、荒川、足立、葛飾、江戸川区、埼玉県戸田市、川口市）を対象に、各種イベントなどを実施している。

（一九九六年一月九日　読売）

◆災害時、ボートで物資を運搬。埼玉県に協力、水運ボランティア。埼玉県川口市と東京・足立区との境を流れる新芝川を利用するプレジャーボート愛好家による「新芝川利用者連絡協議会」（富田国昭会長、会員約百人）が、大災害発生時に自分たちのボートを使って救援物資を輸送する「水運ボランティア」に取り組むことになった。五月オープン予定のプレジャーボート保管施設「芝川マリーナ」（川口市弥平、百五隻収容）に、同県が「総合水防ステーション」を併設させることになり、これを補完する活動として乗り出した。

（一九九六年三月二日　読売）

◆多摩川の水辺。野草や微生物、理解を深める。世田谷区野毛の多摩川河川敷で十三日、「多摩川の自然を考える。水辺のネーチャーウオッチングを楽しもう」が開かれた。区民講座「せたがや自然セミナー」の一環で、約二十人が参加。講師の「多摩川の蘇生を考える会」代表敏蔭雅さんから河川敷に生息する野草について、毒性を持つ種類の見分け方や、川の中の微生物が水の浄化につながっている実態などについて説明を受けた。（一九九六年三月十四日　朝日）

◆川を考えるビデオを作製。街の中を川や掘割がめぐる墨田区が、住民一人一人に身近な川とのかかわりを考えてもらおう、とドラマ仕立ての広報ビデオ「川物語」をつくった。今月初めから区内の図書館、コミュニティ会館でビデオの無料貸し出しをしている。筋立ては、明治時代の船頭音松が船問屋の娘お春と心中を図るが、音松だけが現代にタイムスリップし、お春と生き写しのひ孫鮎に出会う、といった内容。制作費は四百五十万円かかったという。

（一九九六年四月十三日　朝日）

◆景観楽しみ川の将来考えよう。隅田川の清流化運動をしている「隅田川市民交流実行委員会」が毎月一回、川沿いを歩いて景観を楽しむ散策会を開くことにした。「より多くの仲間を募り、川の将来を考えよう」。第一回は二十八日に行われる。実行委員会は一九八五年、河川工学が専門の千葉工業大助教授、島正之さんが中心になって、「シラウオがすみ、子供たちが水辺で遊び泳げる清流にしよう」を合言葉に発足した。現在の会員は五百人を数え、学者や国会議員、河川行政に携わる公務員もいて、勉強会を開きながら隅田川の浄化を考えてきた。発足十一年目を迎えた今年からは、「隅田川大学」と銘打ち、川を通して歴史や街づくりを考えていくことにした。その第一弾が「大学」の実習とも言える水辺の視察会だ。（一九九六年四月二十四日　読売）

◆イルカ丘陵を行く。首都圏グリー

ンベルトの提案。都市の中に「原風景」復元。市民の湿地公園構想、行政が採用。東京都町田市から横浜市鶴見区まで流れる鶴見川。護岸整備の進んだ流れの中で、源流部を除いて自然の川岸が豊かに残っているのが、横浜市新横浜の少し上手の流域だ。川岸に茂るアシ原。その向こうに新横浜のビル群。よく調和している。「ここは隠れた野鳥の宝庫なんです」と、案内役の「ウェルパス」事務局の臼井義幸さんが説明してくれた。この会は、この一帯に建設省が計画した大規模な多目的遊水池の中に、新横浜の原風景である湿地を復元して、まちづくりに役立てようと生まれた企業家や市民のグループだ。名前は「ウェットランド・パーク新横浜」の頭文字をとって付けられた。

（一九九六年五月六日　読売）

◆江東区が、直営する水上バスを都民にもっと楽しんでもらおうと、「禁酒令」を解いたり、開発問題で揺れる臨海副都心をめぐる臨時便を計画したりするなど、知恵を絞った人気回復策に乗り出している。河川公園課は「どんな小さな旅が楽しめるのか広くアイデアを募って、実現していきたい」と言っている。

（一九九六年五月十五日　朝日）

◆荒川区と墨田区を結んで隅田川に架かる水神大橋が来月、全面開通するのを記念して、両区の小学生約五百人による大綱引きが今月二十九日、橋の上で行われる。昭和四十年代初めの「渡し舟」の廃止で疎遠になった対岸同士が、新たに行き来し合える架け橋の誕生。町の人たちは、「綱引きを、二十一世紀を担う子供たちの一生の思い出に」と心を弾ませている。南千住八丁目リバーパーク汐入町会長で記念イベント実行委員長の富岡利夫さんは、「渡し舟が廃止されて以降、とかく疎遠だった両地区の交流を、橋の開通をきっかけにしてどんどん進めていきたい。子供たちの大綱引きが、その第一歩になれば」と期待している。

（一九九六年六月二十七日　読売）

（写真提供：地域交流センター）

◆水泳マラソン大盛況、高知四万十川。「日本最後の清流」を泳いで下る水泳マラソンが今年も、高知県中村市の四万十川で行なわれた。スポーツを通じて自然保護を訴えようと始まったこの大会。「アユと一緒に泳いでみませんか」のキャッチフレーズに、参加者の輪は年々広がっている。北は北海道から南は鹿児島まで全国から過去最高の約三百二十人の選手がエントリーした。主催者の中村市体育協会（森岡邦広会長）によると、出場希望者は五百人を超えたが、運営上の都合で絞り込んだという。

（一九九六年八月七日　読売）

◆墨田区の荒川河川敷で八日、「光と水と音の祭典」が開かれる。地元の十五町会と六つの商店会が主催する街おこしの一策で、名付けて「エコ・アップ・フェスタ（環境向上祭典）」。荒川に水幕で巨大スクリーンを作り、レーザー光線でメッセージを描く大仕掛けのイベントも企画されている。関係者は、街おこしとともに、「将来に向け、人と自然が共存しあえる河川敷に」と祭典に期待を寄せている。京成「八広駅」を取り囲む八広連合十五町会と墨田区商店街第八ブロックの六商店会で「エコ・アップ・フェスタ８８８実行委員会」（委員長・山本政一　八広連合町会長）を結成し墨田区商店街連合会第八ブロックや国際ふれあいルネッサンス有志の会も協力した。

（一九九六年八月八日　朝日）

◆自然の力で環境再生、「ビオトープ」作り活発化。「ビオトープ」という名の自然保護の手法が注目を浴びている。自然環境が本来持つ回復力を利用しながら生物の生息空間を復元しようという試みだ。欧州で七十年代に盛んになり、日本には九十年代に入って本格的に紹介された。そこには生態系を深く理解し自然の営みを最大限尊重しようという哲学がある。東京湾に注ぐ荒川上流を挟んだ埼玉県北本市と川島町。河川敷に約五十ヘクタールの「荒川ビオトープパーク」が広がる。造成したのは建設省関東地方建設局の荒川上流工事事務所。周囲五十メートルほどの人工の池や小高い丘などを配置。池には魚やオタマジャクシが泳ぎ回り、ほとりではカエルの合唱が響く。現在ビオトープは各地で個別に作っており、相互の関係は薄い。限られた空間に動植物を押し込める形になっては健全な生態系の再現とは言い難い。自然保護問題に詳しい桜井善雄・信州大学名誉教授は「点在するビオトープ同士をつなげていく工夫が必要」と話す。（一九九六年九月一日　日経）

◆人と川との関係　一緒に考えよう、郡上八幡・清流カレッジ。豊かな水と郡上踊りで知られる岐阜県郡上郡八幡町の市民大学「郡上八幡・清流カレッジ」が、九六年度の受講生を募集している。過去三年間に全国から二千人を超す参加者があった。今年度は「よみがえれ！いのちの川、暮らしの川」をテーマに、十月から来年六月までに五回の講座を開く。鳥越皓之・関西学院大教授の「お地蔵さんの環境論。環境民俗学の地平から」を皮きりに、郡上竿（さお）作り職人の福手福夫さんを落語家の桂小米朝さんが訪ねる「川の心を訪ねて」など。

（一九九六年九月二十七日　朝日）

（写真提供：地域交流センター）

◆多摩川を大掃除。世田谷区にある国士舘大の学生らで作る組織「国際ボランティア学生協会」と、住民のボランティアグループ「ラブリバー多摩川を愛する会」などの呼びかけで二十三日、多摩川流域の大がかりな清掃が行われた。

（一九九六年十一月二十四日　読売）

◆新潟市には信濃川、阿賀野川の二つの大河が流れるが、実はこの二つの川を結ぶ通船川もある。生活排水が流れ込む「汚い川」だ。この川をよみがえらせ、市民が親しめる川に変身させようと立ち上がった市民グループ、通船川ルネッサンス２１は、この十一月十日には、「クリーンアップ作戦」を展開した。

（一九九六年十二月一日　日経）

◆葛飾区と足立区の境を流れる古隅田川の整備事業が終了し、四日、葛飾区小菅四丁目の古墨田川沿いにある区立白鷺公園で「さかなの里親放流会」があった。

（一九九七年三月五日　朝日）

◆多摩川にウグイの稚魚放流、世田谷で小学生ら四百二十人。世田谷区喜多見の多摩川河川敷で地元の小学生や家族連れが、川にウグイの稚魚を放流した。「自然を大切にする気持ちを育てよう」と、地元の住民グループが毎年開いていて、今回で八回目。

（一九九七年三月九日　読売）

◆東京・墨田区、向島百花園の近くに住む石井貞光は、「ミスター隅田川」と呼ばれる名物男だ。隅田川に魅せられて四十年、浄化運動、郷土史研究、文化イベントなど、隅田川をめぐるあらゆる動きにかかわり続けてきた。七九年、石井は仲間を募って隅田川文庫をおこした。本業であるフリーのＰＲプランナーで稼いだ金をつぎ込み、ミニコミ誌「季刊すみだがわ」や「隅田川絵図」、「隅田川の橋」などを次々と出版、「隅田川を東京の象徴に」と訴えた。また八五年には、両国国技館の開館を機に、「国技館すみだ第九を歌う会」を発足させ、自ら事務局長となった。

（一九九七年三月十八日　読売）

◆ゴムボートで利根川下り、町民が乗り込み水の大切さＰＲ。群馬県水上町は六月、ゴムボートで利根川を東京湾まで下り、水の大切さと同町をＰＲする「水の旅人」事業を実施する。（一九九七年四月十二日、日経）

◆高知県の清流、四万十川中流の十和村の住民らが今年八月、世界有数の滝で知られる米国、カナダ国境を流れるナイアガラ川の上に五百本のこいのぼりをなびかせようと計画している。国際交流で同村役場に勤める米ニューヨーク州バファロー市出身のジェラルド・ボベイさんが四万十川のこいのぼり渡しを見て「わたしの故郷でもしたい」と提案。

（一九九七年七月二十二日　日経）

◆ジャンルを超えた「荒川大好き人間」の集まりとして昨年設立された「あらかわ学会」が十四日、初のシンポジウムを足立区竹の塚センターで開く。荒川流域の都内八区と埼玉県二市を中心に、会員も三百人以上に増えてきた。今後は、会員がそれぞれの得意分野で「荒川の楽しみ方」を考えて、自然、文化、スポーツなどの各種イベントを通して荒川の魅力を訴えていく。会員は得意分野ごとに、「自然環境」「スポーツ・レクリエーション」「安全管理」など七つの委員会に分かれ、今後どう活動していくか検討を重ねてきた。

（一九九七年六月十四日　読売）

◆手製いかだ、多摩川に競う。スター・ウォーズ、ペットボトル、象…アイデア様々五十三チーム。いかだ下りの速さと手作りの面白さを競う「狛江古代カップ多摩川いかだレース」（狛江市観光協会主催、読売新聞社など後援）が二十日、同市内の多摩川で開かれた。

このレースは一九九十年に市制二十周年を記念して始められたもので、市民の憩いの場でもある多摩川の恵みを見つめ直すのが狙い。

（一九九七年七月二十一日　読売）

◆隅田川と周辺地域の生活や文化を見直すことで、地元意識を高め、街づくりにもつなげていこうと、中央区の商工団体が中心となって実現したイベント「第一回よみがえれ中央区の川たち」が九日、同区明石町の聖路加親水公園内などで開かれた。主催は、区青年まちづくり協議会（海野裕二議長）など地元の商工関係者でつくる「水の都中央区を作る会」。

（一九九七年八月十日　読売）

◆川、カッパ、そして町。いきなり、川の話から始まる町誌ができた。福岡県・田主丸町がつくった本だ。コイ捕り名人の「まあしゃん」が登場する。町誌編集部の事務局長は、元ベ平連の活動家である日野文雄さん。東京の大学を出て、ベトナム反戦のベ平連活動に加わった。一九七五年、故郷の田主丸に帰る。フリーカメラマンとして筑後川流域の写真を撮るかたわら、地域活動にかかわってきた。集まった編集委員は、郷土史家や大学の先生ら十二人。日野さんたちのような、低い目線のエネルギーが必要なのだ。

（一九九七年八月三十一日　朝日）

◆荒川の自然守ろう。荒川下流域にある東京、埼玉の九区二市の住民や自治体、企業がボランティアで河川敷を一斉清掃する。「荒川クリーンエイド・フォーラム97」が、来月十二日から十一月三日にかけて行われる。今年で四回目だが、昨年は四千三百人が参加し、約十一万八千点のごみを拾い集めた。主催は、「荒川クリーンエイド・フォーラム」。建設省荒川下流工事事務所も援助している。

（一九九七年九月二十五日　読売）

◆「ごみをなくすにはごみを知ること」―と、荒川支流の河川敷に、どんなごみがどれだけあるかを、市民らでつくる「みずとみどり研究会」が調べた結果、植栽など景観を整えた河川敷では少なく、雑草が伸びた架橋したでは粗大ごみが散らかっている所が多いことなどがわかった。研究会は、多摩地域東京都移管百年記念事業「ＴＡＭＡらいふ２１」で、多摩の湧水と崖線の保全を研究した市民や行政職員らが一九九四年四月に設立した。

（一九九七年十月十五日　朝日）

◆高知県は山、川、海の連携を重視し、河川の流域圏を総合的に学問・研究する学会「四万十川学会」を今年夏にも設立する。学会は河川の環境保全、山林の荒廃防止、流域圏の過疎対策、農林水産業や観光業の活性化、企業誘致など経済・産業振興、地域文化の伝承、地域おこしなど流域にかかわるさまざまな問題を一体的に研究する。

（一九九八年一月十三日　日経産業）

◆知らぬ同士、こげば仲間「Ｅボート」。水ぬるむシーズン。ルアーフィッシングでも野鳥観察でも競漕（きょうそう）でもなんでもこい、というのが十人乗り、手こぎの「Ｅボート」だ。簡単な乗り物だからちびっこから高齢者まで大勢でわいわいがやがや言いながら川遊びを楽しめる。川が交流の場に、組み立てから力合わせて。生みの親は地域づくりを支援しているシンクタンクの地域交流センター。組み立て式Ｅボートが二隻常備してある茨城県御前山村の「なかよしキャンプグラウンド」に出かけてみた。いつでも誰でも気軽に乗れるように、と同センターが実験的に用意した場所だ。

（一九九八年三月二十日　日経）

◆夏の夜明け歩こうよ、秋川渓谷舞台に。朝日に向かって夜通し歩く「秋川渓谷夜明け歩き」が七月十八日深夜から十九日朝にかけて、あきる野市の都立秋留台公園をスタート・ゴール地点にして開かれる。

（一九九八年六月二十八日　朝日）

◆伝統を誇る岐阜市の長良川鵜飼いの遊覧船に十八日、初の女性先頭さんが登場した。鵜飼いの活性化を目指して、岐阜市が今年初めて採用した。（一九九八年七月十九日、朝日）

◆太平洋側と日本海側との「分水嶺」を示す珍しい広告塔が山形県最上町の堺田駅前広場に完成。同町の名所になることを期待。

（一九九九年三月二十三日　日経）

◆石神井川の歴史のわかる冊子、「ふれあい石神井川」が完成。石神井川流域環境協議会（北区・練馬区・板橋区・小平市・田無市・保谷市）

（一九九九年三月三十日　読売）

【用水・掘割】

◆金沢市、用水保全条例、来月施行。せせらぎを観光財産に。街を歩いていても何げなく見過ごしがちな用水。街の景観に与えるその意義を再確認しようと、金沢市が全国にも例を見ない「用水保全条例」を四月一日から施行する。城下町に張り巡らされた無数の用水は金沢の一つの風物詩だが、これをコンクリートの私有橋などがふさいでしまって水辺の風情をそぐ光景も目につく。市側は用水を周囲の景観とともに保全する一方、違法な私有橋の架け替えを推進する構えだが、既得権を主張する市民との間のせめぎ合いも予想される。

（一九九六年三月二十五日　日経）

◆ソーラーボート水郷に集う。掘割を、どんこ舟とソーラーボートが行き交う。水郷で知られる福岡県柳川市で八月三、四の両日、太陽エネルギーを使ったボートレース「96柳川ソーラーボート大会」が開かれる。日本では浜名湖に続いて二番目、九州では初の「地球に優しいレース」。関東以西から約五十チームが参加する。ソーラーボート大会の話しが持ち上がったのは二年前。佐賀大の池上康之・助教授の提案に「自然に優しいボート。水の街をアピールするにはぴったり」と、柳川市が乗り出した。昨年と今年で計二千六百万円の予算を計上し、ボートの製作教室を開くなどして準備した。優勝賞金三十万―五十万円の大会だ。

（一九九六年七月六日　朝日）

◆玉川上水を歩く。金融機関は玉川上水がお好きなようだ。上水の写真を集めているのは「たましん地域文化財団」。約四十枚ファイルで十冊を数えた。年四回発行している「多摩のあゆみ」でも特集を組み、関係論文を掲載する。

（一九九七年九月十日　朝日）

◆水上交通スイスイ復活。よみがえる「水都」松江。松江市が水辺を生かした観光の魅力づくりに動き出した。「水都」といわれながら今まで手つかずだった資源を見直し、まず汚れていた城の周りの掘に水を引いて遊覧船を航行。これが半年間で乗客六万人を超えるヒットになった。勢いに乗って九八年度は宍道湖を横断して出雲空港（斐川町）と結ぶ水上交通を稼動させる。湖北に新設する観光施設などを船で回る構想も膨らむ。眠れる観光資源がソフトの工夫でよみがえりつつある。

（一九九八年二月十五日　日経）

【公園緑地】

◆二十三区がネット結成。ビオトープ、担当者で情報交換。「都市に鳥や虫と共生できる環境を取り戻そう」と、地域の緑化や自然環境の保全に取り組んでいる二十三区の担当者らが「生き物と共生したまちづくり」をめざすネットワークを結成した。江東区の職員が呼びかけたもので、このほど開かれた初の意見交換会には十七区から四十四人が出席した。ネットワーク作りの呼びかけをした江東区環境整備課の清田秀雄さんは、八八年ごろから実験的にビオトープ作りを始めた。九一年には区の事業化にこぎつけ、公園などに池を掘って周囲に水草やハーブなどを植えたビオトープ「ポケットエコスペース」の整備が同区では進んでいる。しかし、ビオトープ作りのノウハウは確立されておらず、行政は手さぐりで取り組んでいるケースが多い。そこで、清田さんらが「担当者で情報を交換して事業に役立て、都全体でこの問題をとらえていきたい」と、ネットワークの結成を呼びかけた。

（一九九六年一月二十八日　読売）

◆江東区東陽七丁目の横十間川親水公園にある菖蒲園で、咲く花の数が少なくなったため、これを元気にしようと、区民ボランティアが、除草や苗床を作り直す「再生プロジェクト」に乗り出した。

（一九九七年十一月二十日　朝日）

【港】

◆国際水中映像祭、七月横浜で開催。海洋関連の映画や写真から優秀作品を選ぶ「第一回ヨコハマ国際水中映像祭」の開催が決まった。パシフィックジャパン水中映像協会（早川信久代表）が七月、みなとみらい（ＭＭ）21地区の横浜ランドマークタワーで開く。横浜市はこれを機に国際会議、大規模イベントの誘致に拍車をかけ、市内関連産業の振興を目指す。（一九九六年四月九日　日経）

◆藤沢市江の島に近い境川河口で片瀬漁港建設のあり方を話し合ってきた「片瀬漁港・まちづくり会議」は二十四日、山本捷雄市長に提出する提言を求めた。漁港の必要性を認めた上で、今後の実施計画作製に市民参加、情報公開を求める内容で、会議での合意内容のイメージをコンピューターグラフィックス（ＣＧ）で表現したのが特徴。

（一九九七年二月二十五日　日経）

◆漁港をテーマパークに。海のルール学んで。開通が四月五日に迫った明石海峡大橋。橋脚が漁礁代わりとなって魚が群れ集い、市民の釣り船が一段と目立つようになった。おひざ元の神戸市漁業協同組合では漁港を「テーマパーク」とし、市民を港に引き寄せて魚のファンを増やしながら、海のルールを学んでもらう試みを展開している。漁協が市民と接

点作り。「漁協と海峡と大橋、それに新しい集客ゾーンの組み合わせは漁港がテーマパークに生まれ変わる実験的な試みといえる。海と人の関係も変わるだろうが、カギを握るのは漁業者と市民の交流」。神戸市産業振興局の平尾鉄男参事は指摘する。課題は魚ファンを増やし、資源管理のルールを普及させること。「我々も小さな魚は海に戻すなどルールやマナーを守るよう呼びかけ、子ども釣り教室への講師派遣、稚魚の放流、漁港の清掃協力などに力を入れてきた。魚の学校などがオープンすれば漁業者との交流も深まる」。兵庫県釣団体協議会の小林修二事務局長は漁港テーマパークへの期待をこう語る。

（一九九八年三月十五日　日経）

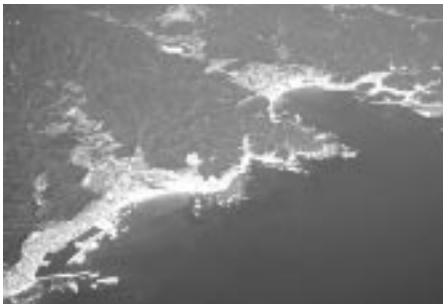
【温泉】

◆ここ数年、「ふるさと創生」の一億円を元手に、あちらこちらの市町村がまちおこしの願いをかけて温泉掘りにチャレンジした。うまく湯脈に当たったところには新温泉が続々と誕生。こうした施設は、低料金に加えて、真新しさと凝った趣向で人気を呼んでいる。格安で楽しめるニューフェース温泉を紹介する。

（一九九六年十二月二十七日　読売）

◆奥多摩で温泉ラッシュ。健康ブームで脚光を浴びる西多摩・奥多摩地区の公設温泉。一昨年六月には檜原村が、同十一月には日の出町が、それぞれ独自に温泉をオープン。これに続けとばかり、今年七月には奥多摩町が、同町氷川に温泉館の開館を予定している。名称も「奥多摩温泉もえぎの湯」と決まった。

（一九九八年二月十九日　読売）



【海岸・海】

◆佐渡のダイビングスポットとして知られる新潟県両津市北小浦を全国にアピールしようと、北小浦郵便局が八日から「風景入通信日付印」を使い始める。日付印は地元の名所などをデザインした消印。佐渡島の形の輪郭の中にダイバーやコブダイ、小魚の群れなどがあしらってある。利用者の希望により郵便物に押してくれる。（一九九六年八月七日　読売）

◆大田区大森地区の街づくりを研究している「大森発見塾」が二十四日、水辺を巡る観察会を開き、住民ら四十二人が参加した。四年目に入った塾の活動だが、今年度は「情報マップ」の原案作りを目指している。一回目の集まりとなったこの日、一行は「海と文化のかおるまち大森」をテーマに、区立郷土博物館で特産だった海苔の歴史を学び、水上バスで城南島海浜公園や東京港野鳥公園などを巡った。

（一九九六年八月二十五日　読売）

◆ダイビングと漁業共存へ。漁業とダイビング。かつて、一つの海をめぐって、あれほど対立していたダイバーと漁業従事者が、いまや共存に向かってがっちりと手を組み始めている。漁獲高の減少、後継者不足。背景に様々な理由はあるが、この十年で三十倍の六十万人にまで膨れ上がったダイビング人口は、各地の海に様々な変化を生み出しているようだ。様変わりするダイビング環境について、音響機器メーカーを脱サラして、伊東市の南端、八幡野漁港で八年前からダイビング事業を営む河合正典さんは「地域の活性化に結び付くことが、漁師さんたちに理解されたことが大きい」と説明する。

（一九九六年十一月二日　読売）

◆「よみがえれニシン」北海道の日本海側からニシンの群れが消えて半世紀。海一面を白く染めた「郡来（くき）」と呼ばれるニシンの群れを復活させようという道庁の資源増大策が昨年始まった。かつてニシン豊漁で栄え、今は過疎に悩む留萌市、江差町などで、「ニシンを町おこしの手掛かりにしよう」とする活動が自然発生的に広がり出している。今年二月、江差町で「郡来る会」が旗揚げした。民間の生涯学習団体「江差地域大学」（今川徳郎学長）のメンバーが中心になった町おこしグループだ。

（一九九七年五月十一日　日経）

◆「海の日」の制定にちなんで昨年、環境保護や水産業関係の団体が実施した「日本の渚（なぎさ）・百選」に選ばれた自治体が七日、千葉県鴨川市に集まり、「日本の渚全国協議会」を設立した。美しい海岸をかかえる自治体が協力し合い、地域振興を図っていくのが狙い。「渚環境の保全を重視し、災害時に物資援助やボランティア派遣などで協力し合い、豊かなふるさとづくりを目指す」とする「鴨川渚宣言」を採択した。

（一九九七年六月八日　朝日）

◆有明海に面した佐賀県芦刈町は、世界で唯一という「ムツゴロウ保護区」を持ち、町おこしに活用中。

（一九九七年七月十五日　朝日）

◆世界三大珍味のひとつ、キャビアを産むチョウザメの養殖で町おこしに乗り出す自治体が相次いでいる。キャビア生産をめざしながら、本格的な養殖に成功するまで親魚を食肉として販売し、食いつなぐ算段だ。岩手県釜石市や宮崎県小林市などで先陣を切り、各地で料理法を研究中。

（一九九八年二月八日　日経）

◆全国の海岸のごみを定期的に調べている市民団体クリーンアップ全国事務局（略称ＪＥＡＮ）が十九日、神奈川県藤沢市の鵠沼海岸で、砂浜に漂着したプラスティックに的を絞ったごみ拾いをする。ＪＥＡＮは一九九十年から春と秋の年二回、全国一斉の海岸ごみ拾いを呼びかけてきた。

（一九九八年四月十七日　朝日）

◆知床の夜空をレーザー光線で彩る「オーロラファンタジー」が、六日から始まる。流氷で埋め尽くされたウトロの海辺で人工的な天文ショーが繰り広げられる。

（一九九九年二月六日　朝日）

【銭湯】

◆着替えの服を銭湯のロッカーに預け、周辺の名所・旧跡を巡りながら予定された十キロのコースを歩いた後は、最初の銭湯に戻って汗を流す「銭湯ウォーキング」はいかが。「日本歩け歩け協会」が事務局を務める「日本市民スポーツ連盟」が、都公衆浴場業環境衛生同業組合の協力で、これまでにない新種の「歩け歩け運動」を、来年一月二十六日からスタートさせることになった。同連盟は、ドイツに本部を置く「国際市民スポーツ連盟」の下部団体で、勝敗を競わなくても良いウォーキングやサイクリング、水泳、クロスカントリーの四つのスポーツを奨励している。「銭湯ウォーキング」は、協会専務理事の木谷道宣さんと、浴場組合副理事長の高橋元彰さんとの話が発端。

（一九九六年十二月二十四日　読売）

◆墨田区で約百年続いた銭湯が私設美術館として生まれ変わった。壁にはペンキ絵に代わって油絵がかかる。利用者の減少により駐車場やオフィスビルに代わる銭湯が多い中で、ユニークな商売替え。

（一九九八年四月三十日　読売）

【島】

◆伊豆諸島

水の浄化に役立つ特産。村おこしの「目玉」に。島内での商品化めざす。抗火石は新島特産の石で、活性炭のように小さな穴が一面にあいており、汚れを吸い取りやすい。

（一九九七年四月五日　朝日）

◆おがさわら新時代。最近、海水を利用した自然塩作りが全国の離島などでブームという。

（一九九八年六月二十四日　読売）

◆おがさわら新時代。観光と環境、共存目指す。今年四月、返還三十年を記念した「アイランド・エコ・サミット」が島で開かれた。テーマは、環境への影響を抑えながら観光を促進しようという「エコツーリズム」。

（一九九八年六月二十七日　読売）

◆「離島」「孤島」と、ひとくくりにされがちだった島の個性を見直し、「いやし」や健康づくりの場としてとらえなおす動きが広がっている。

（一九九八年十一月三日　朝日）

◆西瀬戸自動車道（愛称・瀬戸内しまなみ海道）が五月一日に開通するのに合わせ、同ルート上の六つの島々を歩く「瀬戸内しまなみ海道国際スリーデーウォーク」が四月二十二日から三日間にわたって開かれる。

（一九九九年二月三日　朝日）

【滝】

◆桧原村の名勝「払沢の滝」が全面結氷する日を当てる「氷瀑クイズ」が実施されている。「新東京百景」にも指定されたこの滝は、山間部にあるが、村は夏にライトアップするなどして観光の売り物にしている。

（一九九八年十二月二十一日　朝日）

【雪・氷】

◆雪下ろしツアーで交流

東京の学生グループが短期のツアーを組み、独居の高齢者宅などの雪下ろしボランティアを始めた。

（一九九九年一月三十一日　日経）

◆雪を伝統的な雪室の技術を使って夏の冷房に活用、電力消費を節減しようという計画が新潟県安塚町で進んでいる。雪室は町役場の隣にほぼ完成した「雪のまちみらい館」に併設されている。「雪冷房で、みらい館の夏場の電力消費を六割は減らせる」と試算している。

（一九九九年二月二十四日　読売）